第五地域の歴史を訪ねて

郷土史家　後藤喜平

④塩の道

そもそも塩の道というのはみなさんご存知の通り、太平洋岸から信州塩尻までの塩運搬のルートです。これについては往古より一定の路線が言い伝えられ、また認められてきましたが、戦後郷土史研究の方々が盛んに調査されたらしく、私達が住んでいる地域においても様々な憶測や過誤がなされ、県教育委員会の出されたものにも誤って載っているものもあり、なげかわしく思っております。

『塩の道ウォーキング』p23より

森街道は明治二十四年造成

「塩の道ウォーキング」(静岡新聞社・二〇〇〇年十二月発刊)に載っている、掛川市内モニュメントの位置二つの場所が違っています。

一つは秋葉通り屋台小屋の前のモニュメント(図中①)です。この森街道は明治二十四年から造成され明治三十二年県道に昇格したもので、それまで道もなかった所で塩の道から大きく外れて建っています。

この本では、塩の道は広岡敏雄さん屋敷角(図中②)から西進し森街道に、それからモニュメントの現在地に到っています。

原因は間違った道標の位置に

このようなことが何故起こったかというと、昭和五十七年頃の教育長伊藤昌明先生(富部出身)の書かれたものに、「塩の道は大池橋より分かれ北西に田圃の中を進み、遠山さん宅の下(図中③)に到り」というのがあった。これは昭和天皇の御大典を記念して秋葉通り青年会の建てた道標が、森街道からの分岐(図中④)と遠山さん宅下のT字路にあったことに起因すると私は思う。遠山さん宅下の道標は国一バイパスに埋没して無いが、森街道の分岐点の道標は元の所にある(図中④)。これを見て森街道を掛中へ通った伊藤先生の塩の道説は生まれたものと思われます。

思ったより狭い塩の道

元来重要な路線である塩の道も思ったより狭く、大池より新田へ越す中坂(図中⑤)も、峠越えであったのを切り通しとした急坂で、頭の上にはすすきが覆いかぶさり荷車のやっと通る道が昭和六～七年頃までの様相であり、これが垂木村から掛川へ出る唯一の幹線道路でした。

本当の塩の道

なお本当の塩の道は、広岡敏雄さんの角(図中②)を曲がらず北進し、秋葉路団地に到る地点(バイパスに埋没)より源ヶ谷池堤防下を西に進み、バイパス大池インター付近を北に回り(図中⑥)、遠山嘉一郎さん、伊谷さん、山本さん宅前を通る旧道を経て今の舗装道路に出て、山を越えて新田地内に入る。新田から先も、図中⑦のルートが正解で、十二所神社前のモニュメントも考え直さねばならないだろう。

「塩の道ウォーキング」と銘打った本が、事実と違った記述でまかり通っている。こうしたものがでてしまうと、修正は中々できなくなってしまう。なお源ヶ谷池東の秋葉路を通る旧道云々は影も形も無い嘘である。

[編集後記]

この号は、昨年度の広報部部員のみなさんの協力で完成することができました。役を降りた後まで取材に協力して頂き、この場をお借りしてお礼を申しあげます。

＜広報部員＞　杉原芳夫(七日町)、久嶋朗夫(二瀬川)、古屋　真(上屋敷)、平松知子(秋葉路)、大石格文(秋葉通り)、平尾鉄馬(鳥居町)、横島美登里(橘町)、服部　保(末広町)、高鳥　博(長谷)